

8-5

參考資料NO61

昭和35年4月

第12回婦人週間

第8回全国婦人会談部会概要

佐賀婦人少年室

労働省婦人少年局

才ノ部会（家庭婦人の問題）

才ノ日は、自由時間をどのようにして作り出したか、またこの下策の障害は何であつたか、そしてそれについてどう対処したかについて、才2日は、そうして生み出した自由時間をどう使っているか、またどう使うべきかについて、おもに話し合われた。

1. 自由時間をどうして作ったか、

家事の合理化と計画化によつて、一方また家族の協力によつて自由時間を生み出した体験がほとんどの會議員によつて話された。家事の問題については、家事のやり方についての既成概念をすてるということがとくに強調された。又家族の協力態勢をつくるために、家族、とくに夫との話合ひに努力したこと、子供に自主性をもたせるようなしつけに努めたこと、また老人に対しては、自由時間の卑しみを教へて共にたのしみことに成功したことなど、それぞれの努力や積重ねの過程が具体的に話された。又生活の中に目標を立て、自由時間をまず天引きするというくらし方や、交際のために浪費する時間の節約から自由時間を生み出した体験なども話された。

2. 自由時間を作る際の障害について

家庭内の問題としては、家族の無理解（とくに夫・老人の）と、育児の問題がまずあげられ、どのようにして夫の協力をうるかという問題についてはとくに熱心に話合われた。嫁の立場の主婦からは姑への気がねがもつても大きな障害としてもちえられ、そのような障害をのりこえた各自の体験が具体的に語られた。また育児の問題については、主婦が利用しうる託児施設、希望が出された。また日本の家屋構造の問題として、主婦のために独立した部屋がないということが、主婦が自由時間をもちにくい原因の一つとして指摘された。家庭の外からの障害としては、不意の来客のために計画がこめられてしまうこと、いつも忙しんでいると怠けものともみえるような世間の眼がめらることに、団体の役員を一つ引受けるに、次々と役職につかえられ、そのような仕事が特定の人に過重になること、などが現実に関わっている問題としてあげられた。

3. 自由時間の使い方について

現在自由時間をどう使っているかについて話し合われたが、まずプライベートな使い方としては、読書をするという人がほとんどで、そのほかラジオによる勉強、作詩、作文（投書や寄稿のための）、スポーツ、音楽、手芸など、放養

や趣味のために自由時間をおとっているという報告が多かった。
対社会的な活動としては、サークル、グループ活動に指導的な役割をもっている人が多く、また集団住宅地での託児や農繁期の季節保育所の世話をしつづけている人、盲人への奉仕のために英字を習ったり、身よりのない老人の世話をしているという人もあった。

比較的自由時間に恵まれた家庭の主婦たちが、今後その時間をどう使うべきかについても話し合われた。
結論としては、社会とのつながりの中で、一人々々が社会のために役立つと同時に、収入が得られ、又老後の生活設計ともつながるような自由時間の使い方が、もつてほしいというのがほとんど一致した考え方であった。これに関連して、パートタイムの職場や、ホーヘルパーや保母（多くは職業をもつ主婦のための託児施設での）などどのような主婦に適した仕事に、主婦が受け入れられる道をいらいしてほしいという意見があり、これに対し特別オブザーバーから、与えられるのを待つのではなく、主婦自身が積極的に動いて自ら道をいらく覚悟が必要ではないかという意見が述べられ、またリーダーから、組織の必要性について助言があった。

4. とくに問題点として話し合われたこと

○ フライバイトな自由時間と集団の中での自由時間について
おもに家庭内で(自分一人で)もつ自由時間と、集団の中でも
つ自由時間と、そのいずれを優先させるかについて討議された。
子供が小さいうちは家庭内での自由時間に重点がおかれることは
やむをえないという意見、あるいは、やがては外へ出て活動する
ための基礎をつくるべく、やはりあたりは一人で勉強するところから
はじめたいという意見が出されたのに対して、集団の中でこそ個
人の真の成長も期待できるのだから、まず集団に出るべきである
という意見が述べられた。

○ 自由時間を意識しない人の問題

自由時間をもてない人、もとうという意識のない人、又時
間はあるが無駄に使っている人をどうするかという問題が重
要であるとして話し合われた。これらの人々への働きかけに
成功した体験などが話されたが、時間の関係もあつて討議は
充分につくされないで終わった。

オズ部会 (勤労婦人の問題)

勤労婦人の場合は、労働時間をはしめとする各種の労働条件が、その生活時間に大きな影響を及ぼしている。そこで、オズ日は、各自が当面する問題を、主として労働条件の面から話し合うと共に、自由時間を持つことを妨けている要因についての討議が行われた。オズ日は、これらの問題を掘り下げると共に、自由時間をどのように生み出し、使っているかについて、話し合われた。

1. 労働条件と生活時間の関係

① 労働時間について

労働時間の長短と同時に、仕事の性格・質が各自の生活時間に及ぼす影響について話され、「教員の場合は勤務時間が終っても、教育の仕事から解放されない。」「仕事の性格上、休日や夜も自宅に相談にこられ、自分の生活が持てない」などの例が出されたが、自分自身の生活を確立させるためには、仕事の領域についてどこかに限界線を引き必要があることが話し合われた。又「交替勤務制のため生活が不規則

別にけり。充分な睡眠時間や休憩時間をとることも
すかし「」との問題も出た。

そのほか、超過勤務が常態として、労働時間をゆか
めている事例が、ノ部の会計員から提起された。

○ 有給休暇等について

有給休暇を完全に取り人は少なく、殆んどの人が不
時の場合に備えて残してゐる実情が話され、又産前
産後休暇についても、周囲の事情から充分とせず、体に
無理が生じやすいとの意見も出された。

前記の各問題について、現状を改善して各自の生活を確立するにはどうしたらよいかを討議され、○仕事に自主性を持つ。○仕事の能率化をはかる。○仕事と再検討し合理化できる面は合理化して再編成する。○定員を増加する、などが解決の方策として出されたが、一方「仕事の過重なので、定員増加・労働時間の短縮を要求すると、管理者側から機械化を言われ、結局自分達の取場をせびめるジレンマに悩む」体験も発表された。又産休・生休等については、「女性がその取場を弁えて行くためには、自今の権利が充分行使できなくてもやむを得ない」との意見が出されたが、これに対しては、「自分の権利も積極的に知

ろうとしはい、無自覚な人が多い現状から、仕事のためには仕方がないと制切ってしまう事は疑問だ」との意見も出ている。

② 勤務時間 以外の生活時間

勤務婦人には職場以外の拘束時間として家事労働時間があり、子供を持つ勤務婦人には、このほか育児の時間がある。

① 家事労働について

家事労働は、電化・仕事の手順の合理化・献立の作成・牛製品の使用などの方法により大部軽減されており、特に問題はみられないが、共稼ぎの勤務婦人は、主婦であると同時に職業者であるのだから、主婦として完璧を期そうとすれば無理が出る。これを解決するには、従来の慣習に捉われず、合理的な生活態度を身につけると共に、家族相互の理解、ことに夫の協力が重要なことが話し合われた。

② 育児について

育児の問題は子供を持つ勤務婦人の共通な悩みで、子供の世話も姑や女中に頼んで個人的に解決している例もあるが、その他は職場の託児施設や地域の保育所を利用している。現状では母親と同じ役目も保育所に期待することはできず、そこに問題があるが、更に改善して

安心して子供を預けられる理想的な保育施設を拡充することが必要であると訴えられ、これを実現するために勤労婦人相互及び勤労婦人と一般の家庭主婦等との社会的協力が必要であることが強調された。この問題に関連して、「出産後一定期間は家庭で育児に専念し子供が手を離れたり再び職場に復帰するのが難しい」との意見も出されたがこれに対しては「一度家庭に入つたり現在では復帰は困難である」「育児期間中一定額の手当を国家から支給され、子供が大きくなつたり職場復帰が保障されるような社会保障制度の確立が必要らしい」等の意見が出された。

上記以外に各自の生活時間も拘束するものとして、○仕事と私生活のけじめのなさ、○予時の暮暮、そのほか特殊な例として、○寄宿舎の集団生活における人間関係の複雑さなどが挙げられたが、これについては各自が自覚を持って自分の生活を確立すると共に、相手の生活時間を尊重する態度を持つことがまず解決の方策として必要であるという結論であった。

3. 自由時間について

○自由時間の生み出し方 使い方

自由時間は、まず生活に目的を持ち、それを実現するため、与えられた諸条件の改善を工夫するところから始めて生み出さる事が話され、具体例が発表された。

自由時間の使い方については、○読書・お稽古 ○職場のサークル活動の二つに大別されるが、各自の置かれた条件の下で、自主性をもって自分の望む使い方をすれば、何のために自由時間を使おうと問題はないという結論が出された。

○自由時間と集団

各自がそれぞれ自由時間を追求することから生ずる家族集団の中での個人の孤立性に関して、家族を含めた自由時間の活用必要性が強調され、人間関係を調整しながら、自分の自由時間を活用して行く具体例が話し合われた。

最後に 勤労婦人と地域社会の關係に話しか及び、勤労婦人は地域社会の一員であることを自覚して、生活時間の中に地域の人々と接觸する機会とできる限り求め、地域の人々と協力し合って行くことの必要性が話し合われた。

オ3部会 (家庭内で収入活動に従事する婦人の問題)

オ1日は生活時間についての考え方、自由時間をつくるための方法、自由時間に何をしているか、などについて全員が自由に話合った。オ2日はオ1日の話合いを基礎に自主的な自由時間とは何か について話合いがなされた。その結果、自主的な時間とは、日常生活の中において、自分の自由な意志によつて使用される時間で、自分自身にも対人・社会関係においても、意義のある好ましい方向にあるもので、家族・近隣・社会体制・経済・教育・福祉にも関連をもつものであろうということになった。以上のような自主的な自由時間の定義の上に、次の5つの柱をたて、それについて話合いがなされた。

1 自主的な時間をつくるために家族との協力関係をどうしたらよいか

まず、家族の話合い 或いは だんらんの中に仕事の分担などをきめることが大切である。そのために夫・老人との調和をどうするか、子供に対しては幼い時から身の廻りのことを自分でするようにしつけるなど、各自の体験の中から話合い、他人の生活をおかさず、たりない点をたすけるといふ民主的な生活態度を身につけ、家族の特性や各人の意

志を尊重しながら、楽しい時間をもつようにしてはどうか、ということにまとまった。

ふ 自由時間を生み出すための家庭生活の簡素化について

家事に計画性をもつこと、物の置き場所を合理的に工夫すること、いらない物は合理的に処分することなど(バザー・公共団体などの廃品回収への協力)が話された。また人がしているから自分もするというような受身の形でなく、自主的に判断することが大切で、そのためには教養を高めることも必要であり、個性にあった美しさを簡素の中に持ちたいと語られた。

じ 家庭で収入を得る仕事に従事しているものは、どのようにして自由時間をつくるか

自由時間を持てないほど忙しかねばならないのはどこに問題があるかということになり、/日8時間働いて/日の生活ができるだけの収入がほしい、自分の能力一ぱいに働いても最低生活がまかなえるだけの収入が得られないものには、最低賃金の保障がほしい、と内職などの工賃の低いことが問題になった。これは大きくは日本の政治・経済の問題につながることであるが、自分たちで自主的な

グループを作つて、関係者と交渉し中間搾取を除くなど、自分たちでできることをまず実行することも必要ではないか。一方において政治的解決を要望しなから、手もとを合理化していく態度かのそまれるということが語られた。

次に主婦が仕事を持つてゐる家庭の子供のためには、保育所などの社会施設も必要だが、手近な解決策として、地域にボランティア活動をする人がほしい。または未亡人などに皆で報酬を払つて子供をみてもらうことも一つの方法であり、それには適当な地域の資源(寺など)を子供のあそび場などに活用することも自由時間を生み出すことと大さなつながりがあるということになった。

また、労働の密度を深めて仕事を能率的に処理することが必要であるが、小売商の場合など客相手の仕事なので手待ち時間が多くて自由時間を見出せないとの悩みが語られた。この点については使用人の有無・業態などの商売の状態や地理的条件によつて一率にはいかたいが、商店主同士が訴合つて同業者或いは町ぐるみの通休制や、営業時間の短縮などを実施することが必要で、この実施については消費者の協力かのそまれるということであつた。

4 自主的な時間を持つための生活環境の改善について

小売商の休日法律できめてほしいという意見があったが、こういうことは、法律に頼らず自主的に解決する方法を考えたいとの意見が出され、店主にどのようにして協力してもらうか、消費者と店との理解を深める方法などが話合われた。

また、米客のために自由時間が侵されることについては、あらかじめ、今日は忙しいから何時までしかお相手できないと自分の条件をはっきりいうことが必要との意見が出され、生活環境を改善するためには勇気を持って体当りすること、周囲に共鳴者をつくっていくことが必要であろうとの話合いがなされた。

5 自主的に生み出した時間をどのように使うか

会議員それぞれの体験や希望が話合われた後、リーダーは、自主的な自由時間をどう使うかは人／人違うが、誰にも共通することは、休養をとること、生活の中に楽しみを見出すことである。また夫婦がなかよくしていき、家庭も明るくなるし、それが社会も明るくしていくことになる。主婦自身がたのしみを知らないと、使用人をたのしませられないのではないか、趣味をもつこともよいことである。いすれにしても計画を立てることにとら

われて、遂に時間ノイローゼにならないよう自主性のある時間にしたいものである。また、お互いに思いやりを持って相手の生活を尊重しようと結ばれた。

オタ部会(農業、漁業にたずさわる婦人の問題)

オノ日は、自己紹介をかねて会議員全員が、各自の生活状況や地域の実状等について話し、オス日は、オノ日の発言り中に出て来た生活時間、自由時間に関連した問題等を中心に、具体的に話し合いがなされた。

1. 生活時間の設計する意義について

何故生活時間を計画しなければならぬかについていろいろ意見が出されたが、結局、生活時間の設計は、自分のために、また人のために、各自が今日生きる喜びを感じつつ、過去から引きつぎ、未来、子孫に繋がるよりよい生活を築き上げる使命を果たすために必要であるということになり、その意義を認識して自由時間の問題に移った。

1. 自由時間は果して作れるものか

農村では一般に農繁期は自由時間がないというもので、農繁期、農閑期の区別なく絶えず忙しいという声があつた。しかし一方では自由時間は生み出せるものであるという意見が出された。これに対して、生み出すことはあつたとしても、特に若い嫁にとつては困難であるという対立意見等もあり、これから農村の自由時間の確保を阻む原因やその解決策が次に話し合われた。

1. 自由時間のとれない理由

(1) オノの理由として自然条件、立地条件のきびしさがあげられ、電化設備もなく毎年冷水害に見舞われる開拓地、反当り收穫の少ない山間地や單作地帯、秋の收穫が肥料代の支払い等に当てられ、正月にはむねから始める零細農業、只夢中で休めねばならない実状が語られた。

(2) オノに次々と改良した耕耘機等を買わせられ、その借金返済のために一層休めねばならない「機械化貧乏」の話、機械化により生じた副業にあってるという実状、更には水田、畑、山林、タバコ、果樹栽培等の多角経営で、農繁期期の区別なく忙しいという意見など、農業生産のあり方に因る実状が述べられた。

(3) 次に家族関係の難しさからくる理由があげられ、ここでは入浴にも順序が定められ順番がくるまで作業服とぬげない実例や、只働きさえすればよいという考え方から、早く仕上げて手回しぬいた、遅く帰ればなまけていたといわれ、すれちがいの人に挨拶もせず走り廻っている若娘の姿が訴えられた。

(4) また、生活の計画化や、営農の合理化を図ろうにも、一天氣相手の百姓には無理であるとか、努力する者と生意気だという近隣の声や、部落関係の難しさなど、農村と取まく根深い因習があることが話された。

1. 解決策について

(1) 自然条件等とどうにもならないものにしてあきらめず、希望のある方向への転換をはかる工夫が必要であり、その実例として、畑作のみでなく乳牛を取り入れ、生活にゆとりを持った開拓地の話が出された。

(2) 農業生産は①作業、機械の共同化を図ることが最も望ましく、売上げ金は共同単位にプールする、共同機械の責任ある管理は自己の利害と直接結びつくものであることや、他人への奉仕の精神をもつべきであることと自覚する、米不足時の臨時措置である早場米奨励金と一般米価に含ませる國策転換と要求する策が話された。②機械化貧乏から抜け出るには、生産、収入と見極め機械購入との均衡を図るべきであり、③記帳生活を実施し、営農のうまくゆかない原因と把握して計画営農を行なう。④商人に乗せられないよう協同組織としての農業協同組合をもちたて、その機能を十分活用すること等があげられた。

(3) 家族関係の調整、特に嫁の自由時間の確保、因習打破等については、リーダーから「しつかり者の姑のいる経済的に恵まれた、或農家の若嫁の産後投身自殺事件」の実例が出され、これとめぐって会議員が問題点や、解決事例について意見を交えた。最後にリーダーがこれとまとめ、農村を取まくこれらの封建的な鎖を断ち切るには、①若嫁はよい知恵と力かして生産に参加する。

(生産活動と小家族単位にふ分して自立生活と確立した或会議員の事例が引用された。) ② 争の解決も急いではならぬ。

③ 気持と明るく太い神経をもつ。④ 時にはよい意味の演技力も必要である。⑤ グループ活動と家庭の家族会議と結びつける。⑥ 老人にもできる生産活動や必要な小遣を与える。⑦ 自由時間を相互に尊重し合う意識と高めることなどが必要であるが、更に各人の性格、境遇、家庭や地域の状況等により、それぞれ解決手段が異なるものであるから、各自が最良の方法と自主的に考えるようにすることが望ましいと述べられた。

(4) 地域や部落における調整、普及やグループ活動の基本的態度としては、固口を広げ、誰もが入り易い形にして相互が近づき合うように努力し、協同して地域社会をよくすることが確認された。

1. 自由時間の使い方について

農繁期の自由時間は一般に休養に当てられるが、農閑期の自由時間をどう使うか、特に他人の自由時間とのふつかりをどうするかについて意見が交され、午後8時を“お母さん時間”としてサイレンを鳴らし、主婦が自室で自由に過ごす事例等が紹介された。また、自由時間と自由に使える金銭は、共に

人間解放につながるものとして、農村婦人にとり重要なものであるとともに、その利用の知恵、工夫は主体的に各人にあることが話し合われた。

